

くじら日記

太地町立博物館から

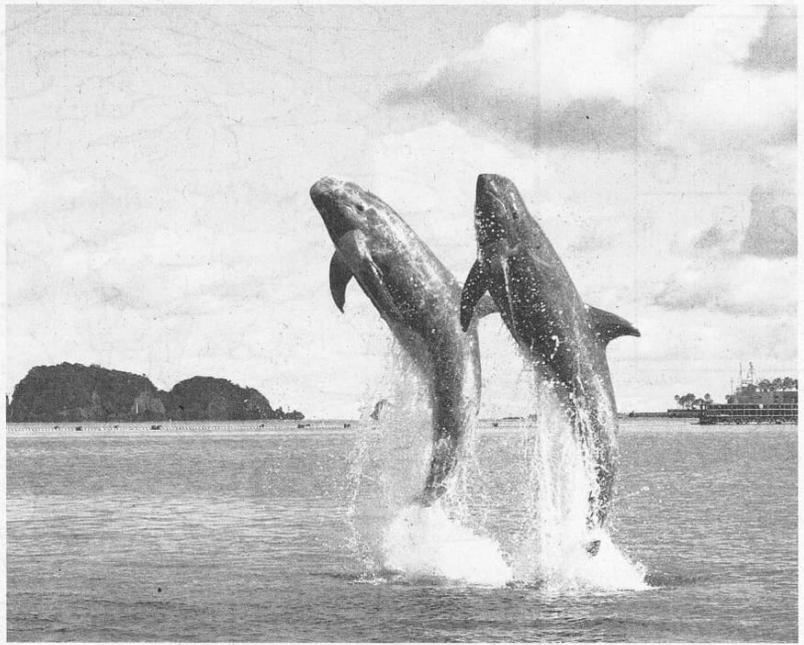


太地町の北西に位置し、三方を山で囲まれ、波があまりたたく穏やかな森浦湾。鯨類飼育の拠点となる区域は約25万8000平方メートル（最大深度14メートル）で、くじらの博物館自然プールの約22倍の広さです。くじらの博物館の飼育員は、「森浦湾へくじらの海」で暮らすくじらのお世話にもいそいでいます。

森浦湾における飼育事業は2014（平成26）年。クジラの学術研究拠点として鯨類飼育の環境整備を進めるべく「森浦湾くじらの海構想」にのっとり、生け簀1基を設置し、飼育最適種とされるバンドウイルカ2頭を搬入しました。

自然プールと比べ、水質が良く、冬季の水温が比較的高いことなど、飼育環境の特徴もわかってきました。2020（令和2）年には、生け簀

「森浦湾くじらの海」



「森浦湾くじらの海」でジャンプするハナゴンドウ＝太地町

壮大な計画に飼育冥利

は約30基に、飼育種頭数は年間を通して5種100頭以上に拡充したほか、区域を38

0坪の網で仕切り、158坪の海上遊歩道を設置しました。海上遊歩道からは生け簀

内のバンドウイルカを観察できるほか、日中は、生け簀から放たれたハナゴンドウなどを観察できます。「構想」は「計画」段階に進み、新たなスタートを踏み出しています。

自由奔放で独創的な発想から生まれた「くじらの海」での飼育もまた規格外。100頭以上のイルカとクジラたちの顔を見分け、それぞれに必要な餌や薬をやり、毎日のちよとした変化に気付いて健康管理するには、記憶力と観察力が頼り。また、両手に10キの餌バケツを持ち、1日の大半を洋上で過ごすには体力も必要です。

しかし、一番大変なのは、生け簀から放たれて散り散りになったクジラたちを時刻になつて呼び戻すことです。広大な森浦湾で一頭一頭探して、連れていくのは至難の

業。そこで、水中で使うダイビングベルを鳴らしたところに来るようクジラたちに訓練を施したうえで、1つの場所を集め、誘導していますが、発情などで個体同士の関係が乱れると、ベルの音に反応しないこともあります。成熟した雄のハナゴンドウ「シロ」が1頭の雌クジラから1週間離れず、生け簀に戻すのに苦労したこともあります。知恵と工夫の研鑽がもっと必要なようです。

町は「森浦湾に30頭のクジラやイルカを放し飼いにし、ゆくゆくは湾を仕切った網も取り外したい」というビジョンを示しています。飼育員の作業は大変になりますが、そのような壮大な計画に取り組めるのもくじらの町「太地」だからこそ。飼育冥利に尽きると、楽しみながら苦労していきたいものです。

（太地町立くじらの博物館 副館長 稲森大樹）

◆ 原則第1日曜日に掲載します。